

両親が大きなローンを組んで買い与えてくれたコンピュータを当時一日で「分解」してしまった時の両親の嘆きは今でも忘れられません。事態の大きさを知った私はまた、更に一日をかけてコンピュータをほぼ元通りにしました。それから10年ほど、まだティーンエージャーの私は起業し、コンピュータにおける日本語変換の仕事をお願いしながら、次第に業績を上げていきました。飛躍するきっかけとなったのは、UCLAの医学部に通っていた二十歳の頃、日本のNECからの大型受注でした。日本へ何か恩返しをしたいと思うに至った、「原点」ともいえるビジネスの転機となりました。UCLAでは医学部に在籍し、素晴らしい就職先もお世話頂いたにも関わらず、勢いが止まらない我がIT企業への思いを捨て切れず、結局医者として働いたのはわずか数日でしたが、生物学、医学を学んだこともまた、

生体認証システムという、地球規模の大きな商材を完成させるために役立ちました。

日本人の技術力、一人ひとりの教育水準の高さ、仕事に対する誠実さ、勤勉さなどが世界に誇れる素晴らしいものであることは、数々の世界水準企業が育ってきた歴史を振り返っても明らかです。しかし、「かつてのベンチャー企業」が世界的大企業に育つ中で、次々と新たなベンチャー企業が育ってきたとは言い難いのは何故でしょう。研究にはお金も人もかけ成功しても一大ビジネスまで育ちにくいのは何故なのか。人・モノ・資金というファクターから私なりに謎解きをしています。新たなベンチャー企業育成、また革新的技術の育成は現代の日本において、ベンチャーマインドを阻害する要素を少しでも無くすように、まず大学レベルで学生達にモチベーションをもっ

てもらえるように、或いはマインドセットし直してもらえるように、年に数十回様々な大学で講義しています。アメリカでは名だたる大学の学長が、ベンチャー企業を2つ3つ失敗させた経験を持っていてそれは決して恥ずべきことだという認識はありません。成功の反対は「失敗」ではなく、「何もしないこと」だと私は学生達に説いています。

資金もなく、自分達でできる「打ちこみ作業」から始まったIT企業が、のちに予想以上に育っていった自らの経験を伝えたいという想いから、今年秋、John Wiley & Sonsから私のベンチャー起業経験談を本にまとめ出版します。“An Unprogrammed Life : Tales of an Incurable Entrepreneur”は、近々是非、日本語でも出版したいと思っています。

## Westwood Reunionのスピーカー 阿部珠理 (立教大学社会学部教授) タイトル: On the Road Again



アメリカ先住民の保留地に調査に出かけるようになってほぼ20年になります。UCLA大学院時代は社会言語学を専攻し、当時はやりの「談話分析」に熱中していたのですが、人との出会いが私の研究分野を大きく変えました。修士課程に在学中、日本の著名な芥川賞作家であった中上健次氏が、家族とともにLAで暮らされるようになり、中上氏の大ファンであった私は、押しかけ秘書しながら、英語が不自由な一家のお手伝

いを何くれとするようになりました。氏の原作の映画がハリウッドで上映されたおりや、アメリカ作家との面談の際、通訳のお手伝いなどして、大学院生には得難い経験をさせてもらいました。

中上さんは、親しくなったインディアン作家の作品を日本で出版することを請け合われ、私に共訳を持ちかけられました。一介の院生にはもったいないお話で、お受けしたのですが双方多忙で、実際その翻訳が完成したとき私はすでに立教大学の助教授になっており、中上さんは末期の癌に冒され、結局私の単独訳となって出版されました。そして本への推薦文が、中上さんの絶筆となりました。

『セブンアローズ』というその本の翻訳のため、私はインディアン社会に足を踏み入れました。だが、本に描かれた伝統の美の世界はそこにはなく、合衆国の最貧の民となった彼らの世界は、荒廃の一語が相応しいものでした。蔓延するアルコール中毒、そこに起因する様々な疾病、家庭内暴力や犯罪に正直失望しました。しかしもう2度

と来るものかと思いつつ、私はなぜかその地に通い続けました。

保留地の人間社会とは対照的な圧倒的な自然の美しさ、それまで経験したロスアンジェルスやワシントンDCの生活とはまったく異質な空間が、サウスダコタにはありました。大平原にうつる雲の影を初めて見たときの感激は、今も忘れられません。だがそんな自然以上に、私をローズバッド・インディアン保留地に引きつけて離さなかったものは、当初の失望を希望に変えたいという想いであったような気がします。

「ぼらのつぼみ」、この希望に満ちた保留地の名称に見合う内実が、どこかにあるに違いありません。そうでなければ、この貧しいラコタ・スー族の、冬は零下20度に達する厳寒の保留地では凍死者や餓死者がでるはずなのに、それが出ないのには何かわけがあるはず。何年もそこに通ううち、私は、一見荒廃に満ちたこの社会の根元に、共同体の紐帯が堅固に存在していることを知るようになりました。その紐帯を支えるものこそ、「ラコタの道」と彼らが呼ぶ、彼らの生きる指針、価値の体系でした。